

. 本論

第1章

ヒンドゥー教寺院に於ける非対称伽藍の特質

はじめに

本章では先ず、主に筆者が作成した伽藍配置図⁽¹⁾を基に、祠堂群の「ずれ」の様態を分析して、本当に敷地中心点が避けられていると見て良いのかという基本的な事実の確認をも含めて、既往の論説の再検証・補訂を試みると同時に、遺構例を個々に分析し、考察の対象とするチャンディの伽藍配置に認められる特質についてまとめることにしたい。ただし、遺構によっては囲繞壁が埋め戻された状態にあり、現状では祠堂群の「ずれ」を確認できない例もあった。その場合、祠堂群の「ずれ」の有無が判別できる精度を有する図面が他にあれば、それを参照して分析を行った。

第1節 遺構例の分析

1. チャンディ・サンビスリ (Candi Sambisari 所在地・中部ジャワ、推定建立年代・8～9世紀初頭)

チャンディ・サンビスリの伽藍には、ヒンドゥー教シヴァ (Śiva) 派のシンボルとされるリンガ (linga)・ヨーニ (yoni) を安置する西面する主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂が配置され、それらを囲繞壁が取り囲むという構成になっている (図1)。

囲繞壁の外周は、一辺およそ 47.5 m (47,350 ~ 47,560mm) のほぼ正方形をなし⁽²⁾、またその内側に、壁から等距離離れてほぼ正方形をなすライン上には、結界を示すと考えられるリンガ状の立石 (以下、「境界石」とする) が、一辺につき三個ずつ、計八個配置されている⁽³⁾ (図1、写真1)。そのさらに内側に配置される主祠堂と三基の副祠堂は、東西に走る中央軸を持ち左右対称形に配置されるが、囲繞壁に取り囲まれた敷地の中央軸線上にはなく、全体に北側へずれて配置される。一方、敷地の中心点は、西面する主祠堂の階段翼壁 (南側) と基壇が交差する隅の部分に一致しており (図1)、同遺構の発掘時にその地点から、十文字の刻線が施された石材が出土したことが報告されている⁽⁴⁾。敷地の中心点には、その石材が置かれていたことを示唆する痕跡が認められる (写真2)。

2. チャンディ・ロロ・ジョングラン・コンプレックス (Candi Loro Jonggrang Complex 中部ジャワ、9世紀中頃)

コンプレックス全体の建築空間は、三重の囲繞壁によって囲まれた、内・中・外苑によって構成されている。本稿で考察の対象とする中心の内苑の外周は、一辺およそ 111.3 m (111,155 ~ 111,509mm) の正方形をなし、その内側には、南北方向に二列に並んだ六棟の主要な建築が配置されている。その内、西側の列の三棟の中心にある最も大きな祠堂は、シヴァ・マハーデーヴァ (Śiva Mahādeva) の像を内陣に安置するチャンディ・シヴァであり、その左右には、ひとまわり小さいヴィシュヌ (Viṣṇu・北側) とブラフマー (Brahmā・南側) を祀る祠堂を従えている (図2)。

内苑に配置される祠堂群は、東西に走る中央軸を持ち左右対称形に配置されるが、囲繞壁に取り囲まれた敷地の中央軸線上にはなく、北側にずれて配置されている。また、囲繞壁の内側の四隅とその間には、計八基のチャンディのミニチュアが配置されており、それらを相互に結んだ中軸線や対角線の交点、すなわち内苑の中心点にあたる箇所が、チャンディ・シヴァの正面階段の翼壁 (南側) と基壇の交差する隅の部分に一致し、そこにもチャンディのミニチュアが寄り添って建てられている (図2、写真3)。

またこのチャンディのミニチュアは、主祠堂四面の階段の両翼壁と基壇の隅の部分に計八基配されており、そのうち東正面南側のもの、すなわち内苑の中心点上に配置されたものは、他

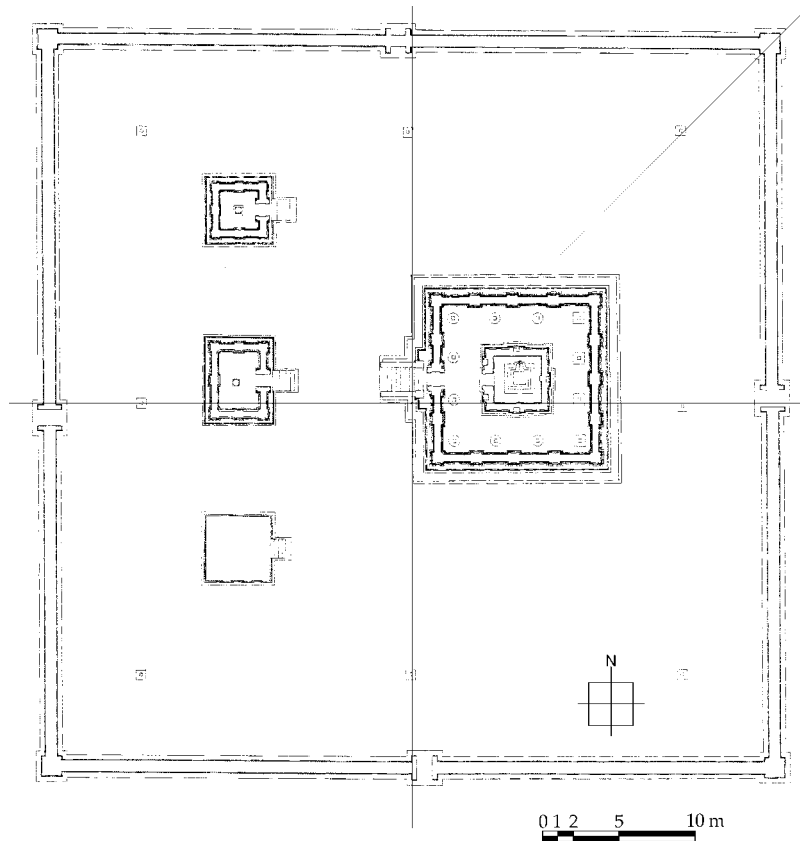


図1 チャンディ・サンピサリ 配置図



写真1 リンガ状の境界石



写真2 敷地中心点の痕跡

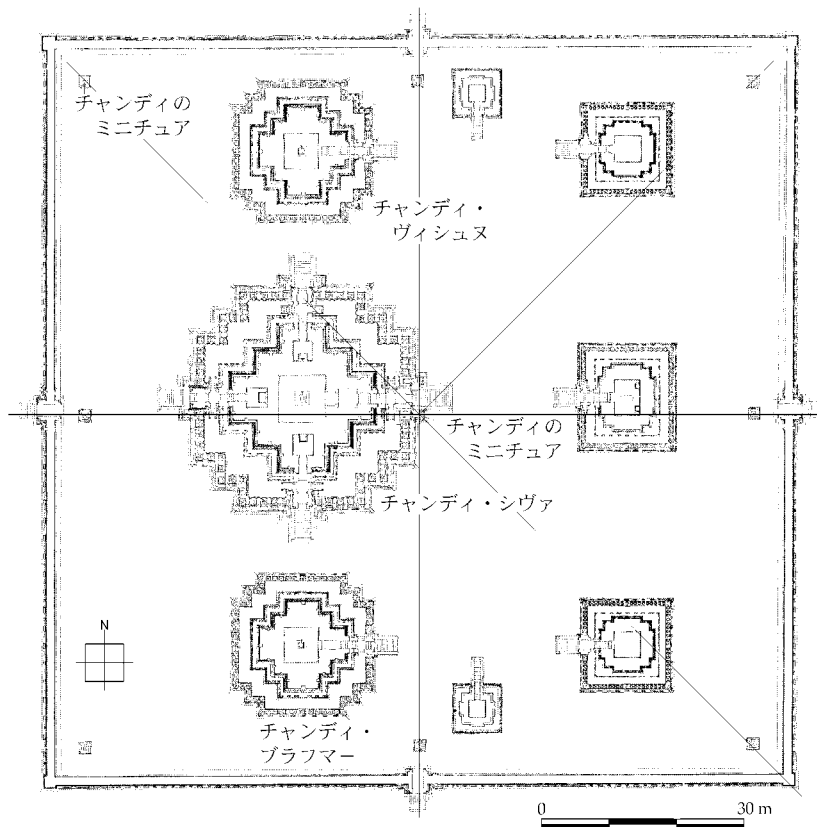


図2 チャンディ・ロロ・ジョングラン（内苑）配置図



写真3 チャンディのミニチュア

の七基とは異なり正面の入口が開放されている。そしてその内部には、十文字の刻線が施された切石が三段積まれていたことが報告されている⁽⁵⁾。

3. チャンディ・イジョー (Candi Ijo 中部ジャワ、九世紀頃)

チャンディ・ロロ・ジョングランの南方には、ラトゥ・ボコ丘陵が北東から南西へ連なっている。チャンディ・イジョーの伽藍は、その丘陵の支尾根の一つの西斜面に沿った、五層の段台状のテラスによって構成されている。最上段のテラスには、内陣にリングア・ヨーニを安置する西面する主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂が配置されている⁽⁶⁾(図3)。

その祠堂群を取り囲む囲繞壁の発掘は十分には行われていないため、一部地上に露出している囲繞壁下部の石材で、当初の位置を概ね保っていると判断されたものを選定して、実測・作図を行った。

上部中央に正方形の穴が穿たれた台座状の切石が、それぞれ敷地の北中央・東中央・南中央・南西隅に計四個置かれている([図3]のa, b, c, d)。南中央の切石([図3]のc)はやや浮いた状態にあり、当初の位置から若干動いていると考えられるため、北中央・東中央・南西隅に置かれた台座状の切石([図3]のa, b, d)と、それを取り囲む囲繞壁の位置を目安にして、敷地中心点のおおよその位置を求めてみた。その結果、主祠堂と三基の副祠堂は、伽藍の中央軸線から全体に北側へずれて配置されていることが確認される。

さらに敷地中心点は、西面する主祠堂の階段翼壁(南側)と基壇が交差する隅の部分にほぼ一致している。また、その部分の基壇前面には小さな龕が施されており(写真5)、またその龕の敷面には、敷地の隅ないしその間に置かれた四個の台座状の切石と同じ形状の切石が置かれている⁽⁷⁾(写真6)。

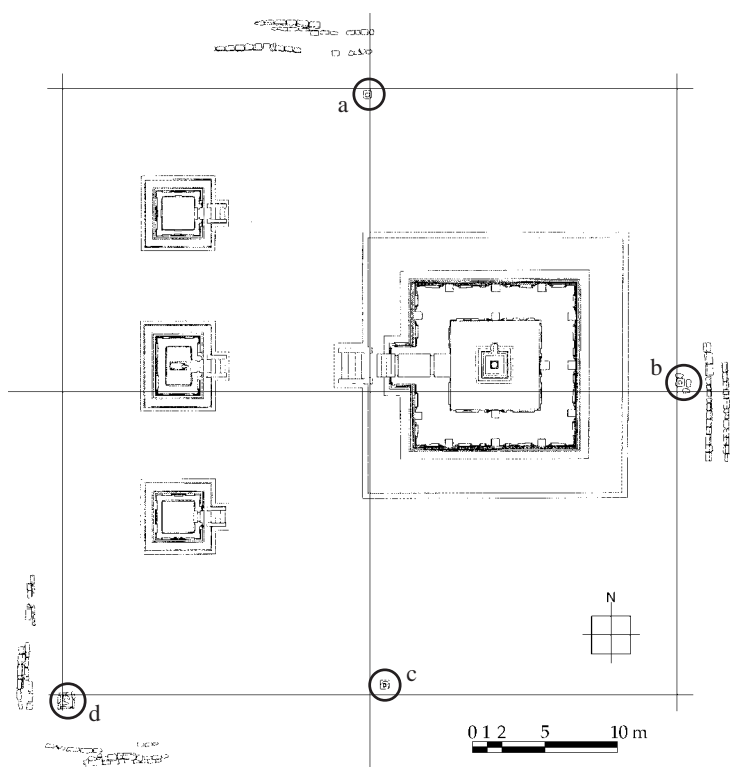


図3 チャンディ・イジョー 配置図



写真4 リンガ状の立石



写真5 基壇前面に穿たれた龕



写真6 台座状の切石

4. チャンディ・グヌン・サリ (Candi Gunung Sari 中部ジャワ, 9世紀頃⁽⁸⁾)

1999年9月の時点で、チャンディ・グヌン・サリの煉瓦造の囲繞壁は、南側と東側の一部のみ発掘された状態であった。囲繞壁の東南隅が掘り当てられているとはいえ、囲繞壁全体の形状は未だ明らかではなく、祠堂群の「ずらし」を判別することはできない。しかし、シヴァ神を祀る西面する主祠堂⁽⁹⁾に正対して、三基の副祠堂⁽¹⁰⁾が配置されている点はサンビサリやイジョーと同様である(図4)。さらに、主祠堂の西正面南側、正面階段と基壇の交差する隅の部分にあたりと考えられる箇所[図4のA, 写真7]からは、リング状の立石(写真10)が、台座状の切石[写真8]の上に立てられた状態で発見されている⁽¹¹⁾。また、同形の台座状の切石が、それぞれ敷地の東中央(図4のB, 写真9)、北東隅から計二個発見されている⁽¹²⁾。

5. チャンディ・グヌン・ウキル (Candi Gunung Wukir 中部ジャワ, 732年頃)

チャンディ・グヌン・ウキルの伽藍には、シヴァ神を祀る東面する主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂が配置され、それらを煉瓦造の囲繞壁が取り囲む構成になっている⁽¹³⁾。現在囲繞壁は埋め戻されており、祠堂群の「ずらし」を判別することはできない。

グヌン・ウキルの敷地中心点も避けられているとの指摘はあるが⁽¹⁴⁾、オランダ領東インド考古



写真7 主祠堂南西隅の台座状の切石



写真8 台座状の切石



写真9 台座状の切石

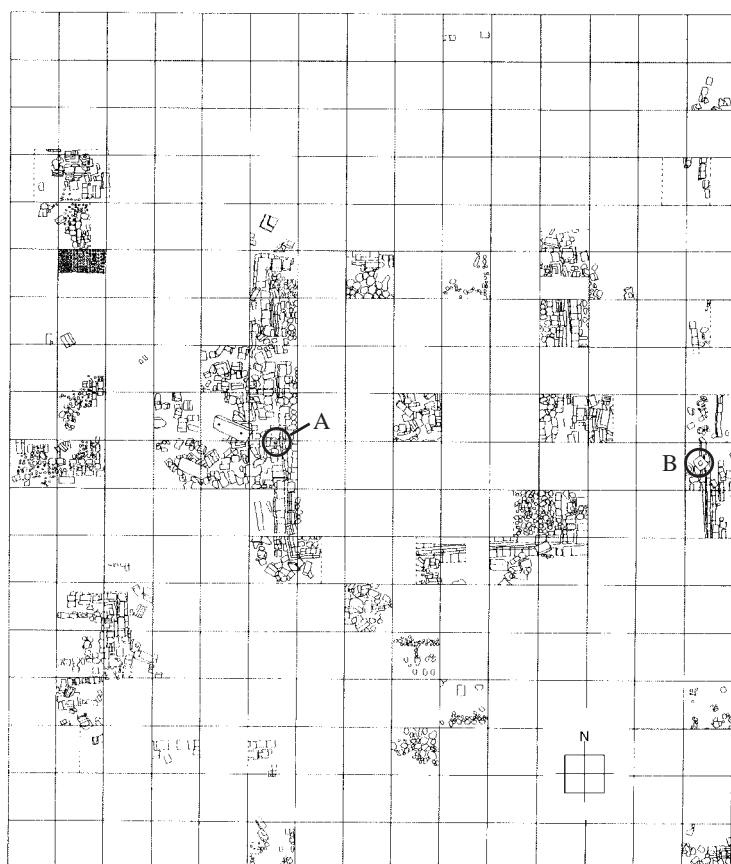


写真10
リング状の立石



写真11 リンガ状の立石(敷地隅)

図4 チャンディ・グヌン・サリ
配置図(中部ジャワ州歴史考古
学的遺産保護局による)

0 1 2 5 10 m

局により作成された唯一の伽藍配置図⁽¹⁵⁾は、筆者が現地で測量を行って検証をした結果、祠堂群の「ずらし」を判別するために必要な精度を有する図面ではないことが確認された。従って、祠堂群がどのようにずらされていたかを確認することはできない。しかしながら、同遺構の発掘調査が行われた際に、敷地の南中央及び隅にあたる箇所から、リング状の境界石が出土したことが発掘時の記録写真により確認される⁽¹⁶⁾〔写真11〕

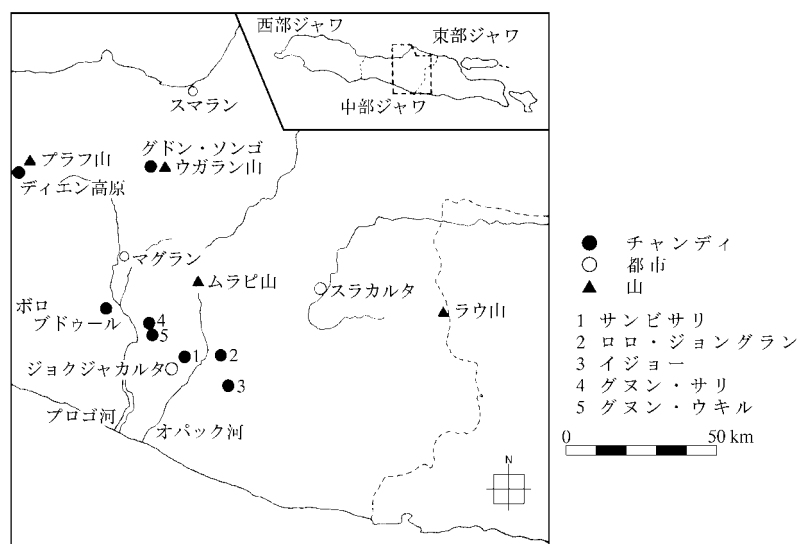


図5 中部ジャワ要図

6. チャンディ・バドゥ (Candi Badut 東部ジャワ, 760 年頃)

チャンディ・バドゥの圍繞壁は現在埋め戻されており、伽藍配置の実測から祠堂群の「ずらし」を判別することはできなかった。従って、インドネシア教育文化省東部ジャワ州事務所による発掘報告書⁽¹⁷⁾に掲載された図面を参照して同遺構の配置図を作成した(図6)。

バドゥの伽藍には、リング・ヨーニを安置する西面する主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂が配置され、それらをほぼ正方形をなす圍繞壁が取り囲むという構成になっている。

[図6]のトレンチa, b, c に、圍繞壁の隅と見られる直角部が掘り当てられたという同報告書の記述に基づき⁽¹⁸⁾、敷地中心点のおおよその位置を求めると、その地点は、西面する主祠堂の階段翼壁(南側)と基壇が交差する隅の部分と大体一致しており、祠堂群は全体に北側へずれて配置されているのが確認される。ただし、敷地中心点からは何も発見されていない。[図6]を、オランダ領東インド考古局により作成されたバドゥの伽藍配置図⁽¹⁹⁾(図7)と比較すると、敷地中心点や副祠堂の位置関係が若干異なっている。筆者が現地で測量を行って検証をした結果、原図の縮尺が百分の一の[図6]の方が、[図7]よりも精度が高いことが確認された。

しかし、バドゥの敷地の南北([図7]のA, B)から、上部中央に正方形の穴が穿たれた50 cm四方の切石が発見されたことが報告されている点は注目される⁽²⁰⁾。

7. チャンディ・キダル (Candi Kidal 東部ジャワ, 1260 年頃)

チャンディ・キダルの伽藍には、シヴァ神を祀る西面する主祠堂⁽²¹⁾と、それに正対する矩形のテラスが一基配置されており、それらを一辺およそ21.5 m (21,475 ~ 21,525mm)の正方形からなる圍繞壁が取り囲むという構成になっている(図8)。主祠堂に正対して配置された矩形のテラスの上部に、何があったかは判然としない⁽²²⁾。

敷地の中心点は、主祠堂の正面突出部の側壁と基壇が交差する隅の部分に一致しており、主祠

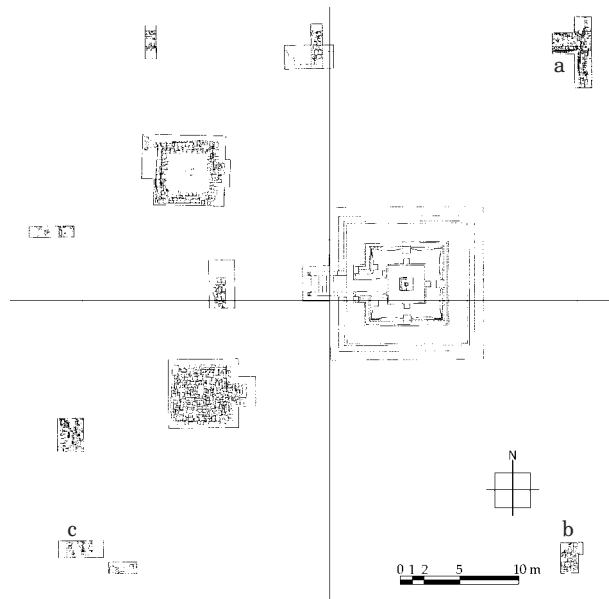


図6 チャンディ・パドゥ 配置図1
(インドネシア教育文化省東部ジャ
ワ州事務所による)

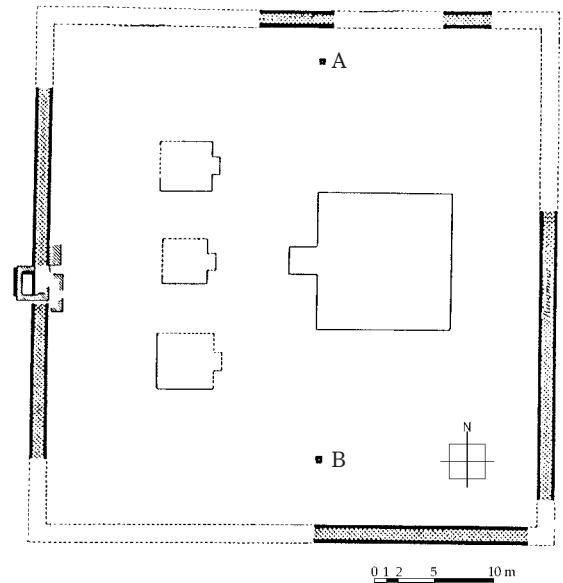


図7 チャンディ・パドゥ 配置図2
(オランダ領東インド考古局による)

堂とテラスは全体に北側へずれて配置されている。ただし、敷地の中心点からは何も発見されていない。

8. チャンディ・ジャウイ (Candi Jawi 東部ジャワ, 1300 年頃)

チャンディ・ジャウイの伽藍には、シヴァ神と阿閼仏を祀るとされる南東に面する主祠堂⁽²³⁾と、それに正対する矩形のテラスが一基あり、それらを掘及び一辺およそ 28.3 m (28,175 ~ 28,435mm)からなる正方形の囲繞壁が取り囲むという構成になっている(図9)。

敷地の中心点は、主祠堂の正面突出部の側壁と基壇が交差する隅の部分にほぼ一致しており、主祠堂とテラスは全体に北東側へずれて配置されている。また、「敷地を定めるための四個の小さなリング⁽²⁴⁾」が出土したことが報告されているが、敷地の中心点からは何も発見されていない。

主祠堂に正対して配置された矩形のテラスの上部に何があったかは判然としない。しかし一方で、ストウツテルヘイム (W. F. Stutterheim) は、ジャウイの基壇第一層に浮彫られた寺苑が、このチャンディ自身の創建時の姿を表すという見解を示している⁽²⁵⁾。確かにその浮彫りの一部には、堀に囲まれた方形の敷地内に、尖塔状の立面を有する主祠堂と、それに正対する矩形のテラスが描かれており、それはジャウイの現状の伽藍構成と酷似している。注目されるのは、浮彫りに描かれたテラスの上部に、三基の木造と見られる建造物が配置されていることである(図10)。

ストウツテルヘイムは、創建時のジャウイの矩形のテラス上にも、三基の木造建造物があったものと類推し、同遺構から出土しているテラコッタの瓦片は、その木造建造物の屋根葺瓦の断片であると推測している⁽²⁶⁾。

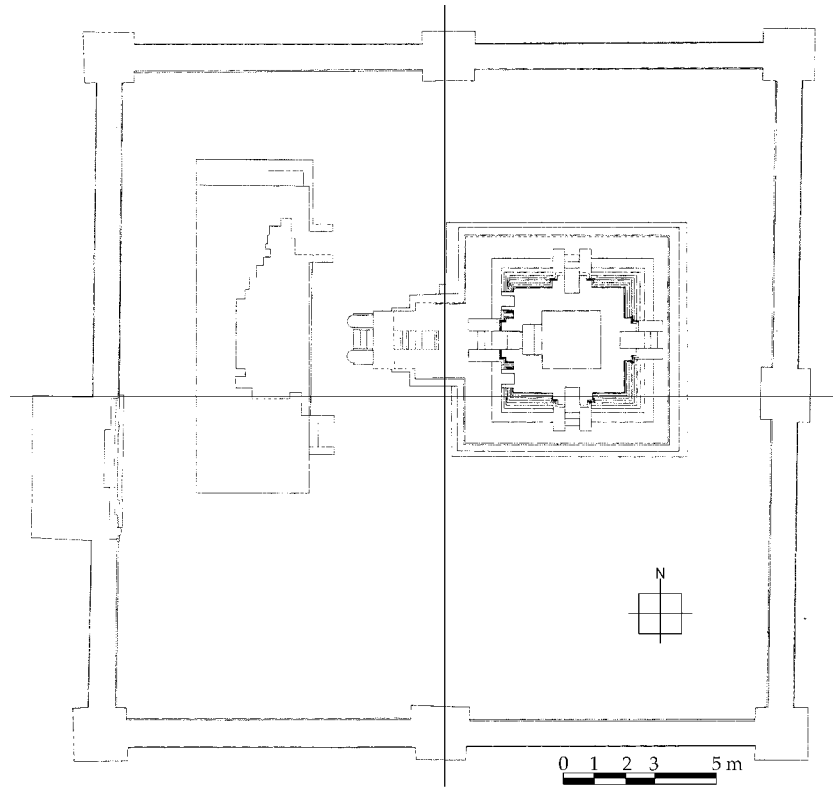


図8 チャンディ・キダル 配置図

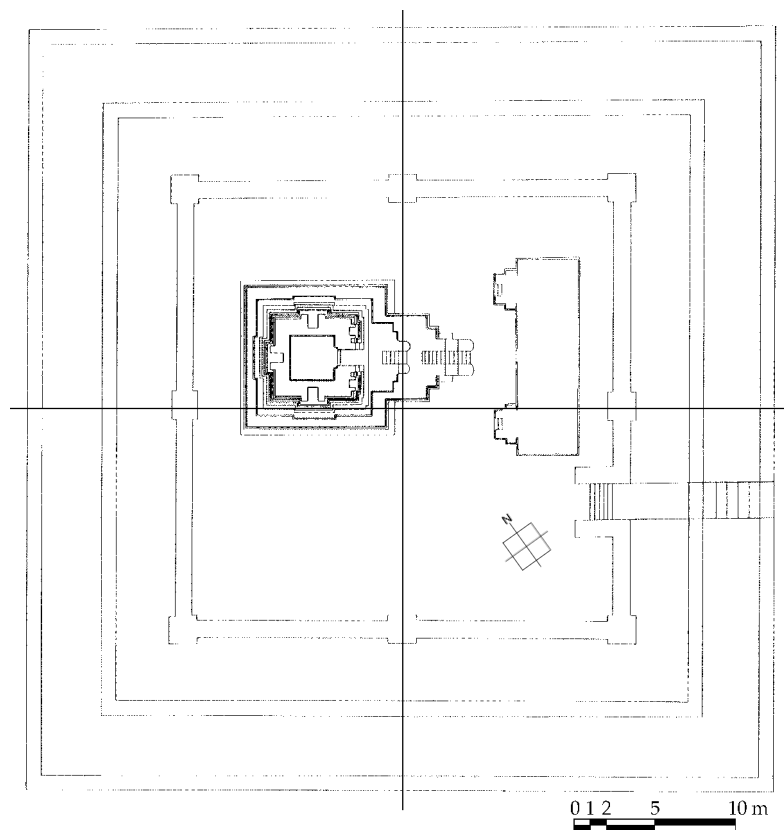


図9 チャンディ・ジャウイ 配置図

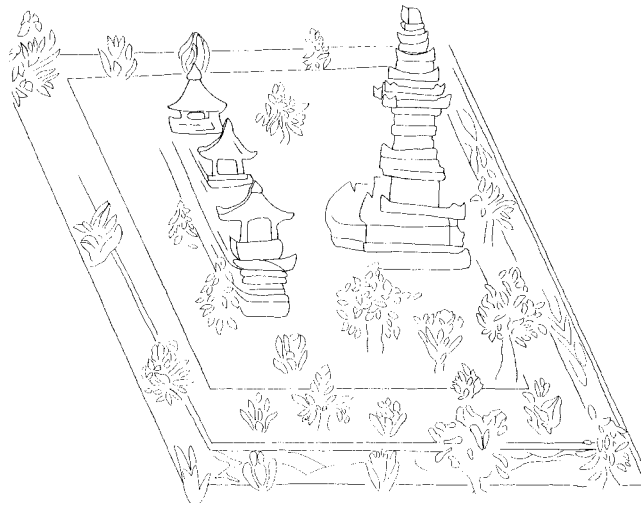


図 10 ジャウイの浮彫り

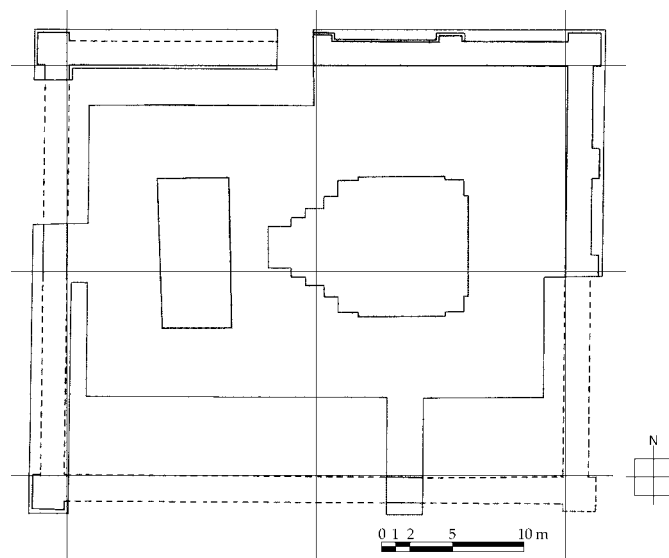


図 11 チャンディ・ランドゥアグン 配置図

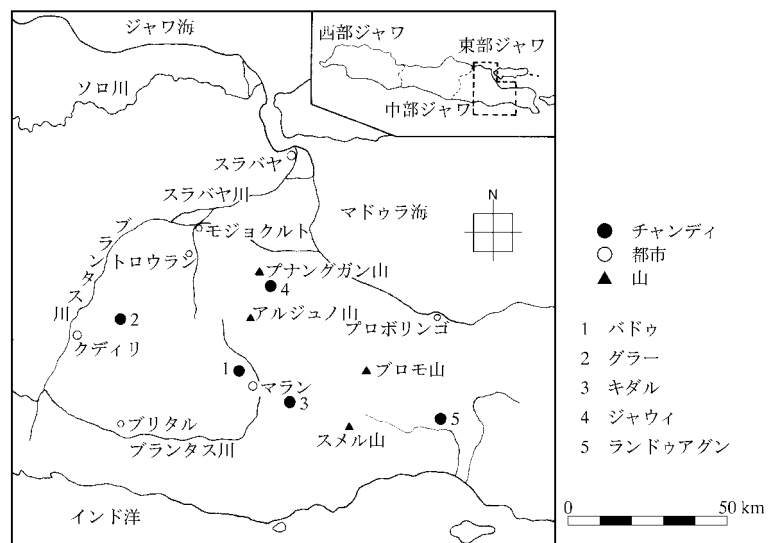


図 12 東部ジャワ要図

9. チャンディ・ランドゥアグン (Candi Randuagung 東部ジャワ, 建立年次は不詳) 及び チャンディ・グラール (Candi Gurah 東部ジャワ, 11 ~ 12 世紀頃)

チャンディ・ランドゥアグンの圍繞壁は現在埋め戻されており, 伽藍配置の実測から祠堂群の「ずらし」を判別することはできなかった。従って, インドネシア考古局の年次報告書に掲載された伽藍配置図を参照して, [図11] を作成した⁽²⁷⁾。その年次報告書には, 圍繞壁から主祠堂までの距離について, 北側が 7.60 m, 南側が 11 m と記述されていることから⁽²⁸⁾, 少なくとも伽藍が非対称となることは確認される。

ランドゥアグンの伽藍には, 西面する主祠堂と, それに正対する矩形のテラスが一基が配置されており, それらを方形の圍繞壁が取り囲むという構成になっている。しかし, 主祠堂に正対して配置された矩形のテラスの上部に, 何があったかは判然としない。

敷地中心点は, 主祠堂の正面突出部の側壁と基壇が交差する隅の部分に大体一致すると見られ, 主祠堂とテラスは全体に北側へずれて配置されている。ただし, 敷地中心点からは何も発見されていない。

チャンディ・グラールの伽藍には, シヴァ神を祀る西面する主祠堂と, それに正対する三基の副祠堂が配置され, それらを一辺およそ 30 m の正方形の圍繞壁が取り囲むという構成になっており, また圍繞壁の内側の四隅とその間に, 計八基のミニチュアのチャンディが配置されていたことが, スクモノによって報告されている⁽²⁹⁾。現在グラールは遺構全体が埋め戻されており, また測量原図の存在も確認されなかったが, スクモノの報告により, グラールも非対称の伽藍構成を有していたことが確認される⁽³⁰⁾。

以上に検討した 1-1. から 1-9. までの非対称の伽藍構成を有する 10 遺構は, 中部ジャワの中・南部から東部ジャワにかけて広範囲に分布しており, またその推定建立年次は, 8 世紀前半から 13 世紀の末までの長期にわたっている。そして, 祀られた本尊を特定できなかったランドゥアグンを除く遺構においては, 伽藍の中央にはシヴァ神を祀る主祠堂が配置され, またその主祠堂に正対して三基の副祠堂を配することが原則になるものと考えられる。唯一チャンディ・ロロ・ジョングランにおいてのみ, シヴァ神を祀る主祠堂の両側に, ヴィシュヌ神とブラフマー神の像を安置する祠堂が配置されている。

第2節 祠堂群の「ずらし」に見る特質

以上に考察した遺構の内, 「ずらし」の様態を確認することができなかったグヌン・ウキルを除く九例に共通するのは, 圍繞壁で取り囲まれた敷地の中心点が, 主祠堂の正面階段翼壁(ないし正面突出部の側壁)と基壇の交差する隅の部分にほぼ一致することである。その内, ロロ・ジョングランとサンビサリの敷地中心点にあたる箇所からは, 十文字の刻線が施された切石が発見され, イジョーの敷地中心点にあたる箇所からは, 台座状の切石が発見されている。さらに, グヌン・サリの主祠堂の正面階段翼壁と基壇が交差する隅と見られる箇所からは, 台座の上に置かれたリング状の立石が発見されている。

既に述べたように, グヌン・サリの圍繞壁は部分的にしか発掘されていないため, 現状では圍繞壁全体の形状を把握することはできない。しかし, 敷地中心点に特殊な切石や小建造物を配置し, なおかつその地点を主祠堂の正面階段翼壁と基壇の交差する隅の部分に一致させるという類例が他に四例存在することに鑑みれば, グヌン・サリの主祠堂の西正面南側から出土したリング状の立石の位置は, 敷地の中心点に一致するものと推測される。

他五例のチャンディの敷地中心点からは何も発見されていないが, 主祠堂の正面階段翼壁(ないし正面突出部の側壁)と基壇が交差する隅の部分と, 敷地中心点とがほぼ一致している点では前述の遺構例に類するものであると考えられる。従って, 寺院の敷地中心点を何らかの理由で特

別視し、その地点を避けるように祠堂群全体がずらされていると見る従来の解釈には、一定の説得性があるといえる。

第3節 敷地の主方位と副方位に位置する地点に配せられた指標物

ロロ・ジョングラン、サンビサリ、グラーの三遺構において、東・西・南・北の主方位、及び東南・南西・北西・北東の副方位に位置する地点には、それぞれ結界を示すと考えられる指標物が、計八個配置されている。地中に埋没した状態で発見されたサンビサリとグラーは、特に遺跡の保存状態が良好であり、前者は八個のリング状の境界石、また後者は八基のチャンディのミニチュア（内三基はリング状の立石を内部に納めている）が、当初の位置を保持した状態で出土している。ロロ・ジョングランの場合は、敷地中心点に置かれたチャンディのミニチュアと同形の小建築が、計八基配置されている。

上記の遺構以外にも、グヌン・サリ、バドゥ、イジョーの敷地からは、上部に正方形の穴が穿たれた台座状の切石が二～四個発見されている。またグヌン・ウキルの敷地からは、リング状の境界石が二個発見されている。この四遺構で発見された台座状の切石やリング状の境界石も、ロロ・ジョングラン、サンビサリ、グラーと同様に、敷地の主方位ないし副方位に位置する地点から出土しており、やはり当初は八個の指標物が、敷地の主方位及び副方位に位置する地点に置かれていたものと推測される⁽³¹⁾。また、ジャウィの発掘時に出土した、「敷地を定めるための四個の小さなリング」も、敷地の主方位に配置されたものであると推測される。

以上、考察の対象とした十遺構の内、敷地の主方位ないし副方位に位置する地点に、リング状の境界石や台座状の切石、あるいはチャンディのミニチュアの置かれる事例が八例認められた。こうした遺構では、敷地の中心点のみならず、その主方位及び副方位に位置する地点も、重要な箇所として認識されていたことが窺える。

第4節 祠堂群がずらされる方向に認められる規則性

ファン＝ロモントは、囲繞壁内に配置された祠堂群のずらされる方向は北側になる傾向の認められる点を指摘している⁽³²⁾。しかし、北側へずらされるチャンディの具体例としては、ロロ・ジョングラン一例が挙げられているのみである。また、これまでに考察を行った十遺構の内、ファン＝ロモントによる前掲書が刊行された年以降に発掘調査が行われた遺構として、ランドゥアゲン、グラー、サンビサリ、グヌン・サリの四遺構を挙げることができる。すなわち、右記のファン＝ロモントの説は、遺構例をすべて網羅した上で再検証されるべきものとする。

[図1]～[図3]、[図6]、[図8]、[図9]、[図11]により、サンビサリ、ロロ・ジョングラン、イジョー、バドゥ、キダル、ジャウィ、ランドゥアゲンの七遺構において、祠堂群は伽藍の中央から全体に北側へずれて配置されていることが確認される⁽³³⁾。また、グラーの「ずらし」が北側となることはスクモノの報告により確認される他、グヌンサリも、既述のように、主祠堂の西正面南側に置かれたリング状の立石の位置が敷地中心点と一致するものと考えられ、またそのように見れば、祠堂群がずらされる方向はやはり北側となる。

東部ジャワのチャンディ・スンプルナナス(Candi Sumbernana 10世紀頃)のように、例外的に祠堂群の「ずらし」が南側になるという例も認められるものの⁽³⁴⁾、以上の九例に関しては、全て祠堂群の「ずらし」は北側になるものと考えられる。

第5節 開口部の「ずらし」に見る特質

考察の対象とした遺構の内、囲繞壁に設けられた開口部の位置を確認することができたのは六例である。その内、サンピサリ、バドゥ、キダル、ジャウィ、グラの五例は、正面の壁に開口部を持つが、いずれも壁の中心から南側へとずれて配置されているのが確認される⁽³⁵⁾(図1、図7～図9 参照)。囲繞壁の正面開口部の「ずらし」が南側になることは、シヴァを祀る主祠堂の「ずらし」が北側となることに連動しているとも見なし得る。つまりこのような入口の構造は、リング等を安置する聖所を外部から直視できないようにするための軸線のずらし、あるいは聖所への魔神・悪霊の侵入を防ぐための観念的な装置とも考えられる。ロロ・ジョングラン(内苑)の囲繞壁の開口部を通過してすぐのところに、チャンディのミニチュアが視界を遮るように置かれていることに、同じような辟邪の効果を想像することも可能であろう(図2)。

しかし、囲繞壁の開口部と聖所の入口とを同軸線上に置かないという配慮があったと仮に想定したとしても、それは囲繞壁の開口部の位置をさえずらせば事足りるはずである。従って、祠堂群全体をずらす意図が他にあった可能性も、否定すべきではないものとする。さらに、寺院敷地の中心点に特殊な切石やリング状の立石が置かれる等の事例が認められることは、見逃せない事実である。敷地中心点が何らかの理由で特別視された結果、その地点を避けるべく祠堂群がずらされている可能性も、考慮されてしかるべきであろう。

第6節 小結

本章では、先ず非対称の伽藍構成を有すると見られるヒンドゥー教チャンディを個々に検証した上で、主に筆者が作成した伽藍配置図に基づきながら、既往の論説の再検証・補訂を行い、その伽藍配置に認められる特質について考察を行った。

正方形ないし矩形の囲繞壁によって取り囲まれた伽藍の中央には、原則としてシヴァを祀る主祠堂が西ないし東面して配置され、またそれに正対して三基の副祠堂が配置される。一見して左右対称の伽藍構成が遵守されているように見えるが、実際には祠堂群全体が、南北方向へ幾分ずれていることが確認される。また寺院敷地の中心点に、十文字の刻線が印された特殊な切石、あるいはリング状の立石等が置かれる事例が認められる点に鑑みれば、その地点が何らかの理由により特別視され、その地点を避けるべく主祠堂がずらされると見る既往の論説は是認され得るものとする。また、考察の対象とした遺構においては、寺院敷地の中心点と、主祠堂の正面階段翼壁(ないし正面突出部の側壁)と基壇の交差する隅の部分とが、概ね一致する傾向の認められることも確認された。ずれは恣意的なものではなく、明らかに一定の規則性をもって伽藍配置計画に取り込まれていることは明らかであろう。

さらに既往の研究では、主に個別の事例において、そのような祠堂群の「ずらし」が北側になることが確認されていたのに対し、筆者は類例を網羅して検討を行い、その結果、祠堂群の「ずらし」は北側になる傾向の認められることが改めて確認された。このような非対称の伽藍構成を有するチャンディは、中部ジャワの中・南部から東部ジャワにかけて広範囲に分布し、さらにその推定建立年次は、8世紀の前半から13世紀の末までの長きにわたることも確認された。

祠堂群が北側へずれている一方で、囲繞壁の正面の開口部は南側へずれる事例が少なく無い。このような軸線の「ずらし」は、リング等を安置する聖所を外部から直視できないようにするための装置、あるいは聖所への魔神・悪霊の侵入を防ぐための観念的な装置であるとも考え得る。

考察の対象とした十遺構の内、敷地の主方位ないし副方位に位置する地点に、リング状の

境界石や台座状の切石，あるいはチャンディのミニチュアが置かれる事例が八例認められた。このことにより，敷地中心点が特別視されると同時に，四方四維に位置する地点も，重要な地点として聖別されている可能性が考えられる。スクモノが個別の事例に対する研究で指摘しているように，八方位を司る諸尊が，寺院伽藍全体を守護しているとも見ることが可能であろう。

注記

- (1) チャンディの伽藍配置の実測には光波測定距儀（機械名，SDM3FR10 ㈱ソキア）を使用し，平面の実測には，適宜巻尺，曲尺等を用いて測量を行った。
- (2) 囲繞壁は二重になっているが，外側のものは一部しか発掘されていないため，ここでは考察の対象から外す。
- (3) アノムは，正方形の囲繞壁と，リング状の立石によって取り囲まれる正方形は同心にはならず，後者は全体に西側へずらされていると指摘している（Anom, I. G. N., *Keterpaduan Aspek Teknis dan Aspek Keagamaan dalam Pendirian Candi Periode Jawa Tengah (Studi Kasus Candi Utama Sewu)*, Ph.D. thesis Universitas Gadjah Mada, Yogyakarta, 1996, pp. 364-365）。しかし，筆者が作成した〔図-1〕において，その二つの正方形はほぼ同心となっている。
- (4) Depdikbud (Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan), *Dua puluh tahun pemugaran Candi Sambisari*, Yogyakarta: Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Daerah Istimewa Yogyakarta, 1988, p. 47
- (5) *Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1938, pp. 6-7
- (6) イジョーの主祠堂は修復された状態にあるが，副祠堂は荒廃の度合が著しく，基壇の最下部のみが残された状態となっている。従って，〔図3〕における三基の副祠堂の平面は，ジョクジャカルタ特別州歴史考古学的遺産保護局（Kantor Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Propinsi Daerah Istimewa Yogyakarta）による復原平面図をトレースして作成した。しかしながら同局は，精度の高いイジョーの伽藍配置図は未だ作成していない。
- (7) 台座上の切石の上に何が置かれていたかは判然としないが，イジョーの敷地内で発見されているリング状の立石〔写真4〕に類するものがその上に置かれていた可能性が指摘される。
- (8) チャンディ・グヌン・サリは，1998年に発掘が始められた遺構であるが，同遺構で発見された刻文の字体に認められる特徴や彫像の作風から，9世紀頃の建立と推定されている（Nugrahani, D. S., Prisantono, H., Fauzi, I. ed., *Laporan ekskavasi penyelamatan situs Gunungsari* 1998, Kantor Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Propinsi Jawa Tengah dan Jurusan Arkeologi Fakultas Sastra Universitas Gadjah Mada, 1988, pp. 41-42）
- (9) グヌン・サリ主祠堂の内陣に安置されていた尊像は発見されていない。しかし同遺構からは，シヴァ神の忿怒相を表したマハーカーラ（Mahākāla）の立像が出土している他，ヨーニの一部やシヴァの神妃ドゥルガー（Durgā）の像があったという報告が近隣の住民から得られており，同遺構ではシヴァが主神として祀られていたと推測されている（前掲書注(8)p. 40）
- (10) Nugrahani, D. S., Prasodjo, T., Tjahjono, B. D., *Laporan ekskavasi penyelamatan situs Gunungsari Tahap II* 1998, Kantor Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Propinsi Jawa Tengah, Jurusan Arkeologi Fakultas Sastra Universitas Gadjah Mada, Balai Arkeologi Yogyakarta, 1988, pp. 29-30
なお，〔図4〕は，同書の巻末に添付された発掘時の図面をトレースして筆者が作成した。
- (11) 前掲書注(8)p. 36

- (12) 前掲書注 (10)p. 31
- (13) *Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1938, pp. 10-11
- (14) Soekmono, R., *Tjandi Merak*, Skripsi Sarjana Universitas Indonesia, Jakarta, 1953, p. 23
- (15) *Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1937, p. 12 に掲載された図面。
- (16) [写真 -11] は敷地隅から出土したリング状の境界石。さらに、オランダ領東インド考古局写真番号 13,379 の写真により、敷地の南中央からも同様の境界石が出土しているのが確認される。
- (17) Sumarno, A., *Laporan penggalian pengumpulan data Candi Badut di Malang*, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Kantor Wilayah Propinsi Jawa Timur, Bagian Proyek Pelestarian/Pemanfaatan Peninggalan Sejarah dan Purbakala Jawa Timur, Surabaya, 1992/1993
- (18) 前掲書注 (17)p. 14-16
- (19) *Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1929 の Pl. 5
- (20) *Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1929, p. 257
- (21) 主祠堂の内陣には、シンゴサリ王朝（13 世紀初頭～13 世紀末）第二代の王アヌーシャパーティ（Anūṣapāti 在位 27～48 年）の肖像を尊像として表した、一面四臂のシヴァ神像が安置されていたとされる（千原大五郎、『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会, 1975, p. 279-280）。
- (22) キダルの主祠堂に正対して配置されたテラスは、現在、殆ど消失している。従って Haan, B. De, “Tjandi Kidal”, *Publicaties van den Oudheidkundigen Dienst in Nederlandsch-Indië-I*, Batavia, 1925, pp. 1-7 の Plaat 17 を参照して [図 8] のテラスの作図を行った。
- (23) シンガサリ王朝最後の王クルタナガラ（Kṛtanagara 在位 68～92 年）は、「シヴァ・仏陀」としてこのチャンディに祀られたとされ、その内陣にはシヴァ神が、また最頂部には阿閼仏が祀られていたと伝えられる（前掲書注 (17)pp. 291-293）。
- (24) *Oudheidkundig Verslag, Oudheidkundig Verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië, Oudheidkundig verslag*, Batavia: Albrecht, Bandung: Nix., 1938, p. 16
- (25) Stutterheim, W. F., “Tjandi Djawi op een relief?”, *Tijdschrift voor de Indische Taal-, Land-, en Volkenkunde, uitgegeven door het Bat. Gen.* 81, Batavia, 1941, pp. 1-25
- (26) 前掲書注 (25)p. 6
- (27) Dinas Purbakala, Departemen P. P. dan K., *Laporan Tahunan 1954*, Djakarta, 1962, p. 28 に掲載された伽藍配置図をトレースして作成したのが [図 11]
- (28) 前掲書注 (27)p. 20
- (29) 敷地の四隅とその間に配置された八基のミニチュアのチャンディの内、北西隅、北側、南東隅の三つのその内部からは、リング状の立石が発見されている（Soekmono, “Gurah, the link between the Central and the East-Javanese arts”, *Bulletin of the Archaeological Institute of the Republic of Indonesia* No.6, Djakarta, 1969, pp. 8-13）。
- (30) ほぼ正方形からなる敷地の東 - 西及び南 - 北の中軸線の交点、つまり敷地の中心点にあたる箇所は、西面する主祠堂の階段翼壁（南側）と基壇が交差する隅の部分に一致していることが指摘されており（前掲書注 (29)p. 18）、結果、祠堂群は全体に北側へずらされることになる。ただし、敷地の中心点に当たる箇所からは何も発見されていない（Soekmono, R., *Candi: fungsi dan pengertiannya*, Ph.D. thesis Universitas Indonesia, Jakarta, 1974, p. 235）。

- (31) 敷地の主方位及び副方位に置かれたリング状の境界石は、敷地全体を結界し、聖別するための指標物であると考えられ、またグヌン・サリの敷地の中心点に置かれたとみられるリング状の立石は、敷地中心点を聖別する指標物であると考えられる。このように、敷地を聖別する意図の下にリング状の立石を配する手法は、いわゆる「シーマ (sīma)」とされる土地の定立の際にも用いられる場合があったようである。ある村や水田などの土地が「シーマ」とされた場合に、その土地の税収の納入先は、国王ないし地方領主から寺社へと振り替えられ、結果その税収は寺社の維持などのために充当されることになる。「シーマ」について、詳しくは Jones, A. M. B., *Early Tenth Century Java from the Inscriptions: A Study of Economic, Social and Administrative Conditions in the First Quarter of the Century*, Dordrecht, Cinnaminson: Foris Publications, 1984, pp. 59-90, 深見純生「ジャワ古代史の再構築 - シーマ定立の政治経済学」『南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開～一五世紀』(岩波講座 世界歴史六) 岩波書店, 1999, pp. 365-372 を参照されたい。

ところで、中部ジャワのクラブヤック (Krapyak) 及びランビアナック (Rambianak) の地からは、「シーマ」定立についての碑銘を有するリングが発見されている。また一方で、同じく中部ジャワで発見されたポレガン (Polengan) 碑文には、「シーマ」とされる土地の隅に「シーマ石 (watu sīma)」を配することが述べられている。以上の諸点を踏まえた上でブハリ (M. Boechari) は、境界石としての「シーマ石」には、リングの形状を有するものもあった可能性について言及している (Boechari, M., “An inscribed liṅga from Rambianak”, *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient*, Tome XLIX, Fasc. 2, Paris: École Française d'Extrême-Orient, 1959, p. 408)。また一方でスクモノは、中部ジャワのチャンディ・ロル (Candi Lor) 及びリントカン (Lintakan) の両碑文において、「シーマ石」の供養に際し供物が捧げられる対象がブラフマーなどに限られており、そこにシヴァの名が見えない点について指摘している (前掲書注 (30) pp. 230-231)。以上の点に鑑みれば、境界石としての「シーマ石」は、例えそれがリングの形状をとっているにしても、通常のリング (シヴァ神を表す象徴物) とは異なるものであった可能性も考慮しなければならない。同じように、寺院敷地の隅や中央に置かれるリング状の立石にしても、いわゆるリングというよりは、敷地を聖別するための指標物とみるのが妥当であると考えられる。

- (32) Romondt V. R. van, “Sebuah tjandi timbul kembali”, *Amerta: warna warta kepurbakalaan* No. 2, Djakarta: Dinas Purbakala Republik Indonesia, 1954, p. 36
- (33) チャンディ・ジャウィは、東ないしは西を正面とする他の遺構とは異なり、例外的に南東を正面とする遺構である。同遺構では祠堂群がずらされる方向は厳密には北東側となるが、この遺構も北側へずらされる遺構に含めて分類した。
- (34) チャンディ・スンプルナナスは、他の類例と同様に、シヴァ神を祀る西面する主祠堂とそれに正対する三基の副祠堂が配置され、それらを囲繞壁が取り囲むという伽藍の構成を有している (Haan, B. De, “Tjandi Soembernanas .Bouwkundige Beschrijving”, *Oudheidkundig verslag van de Oudheidkundige Dienst in Nederlandsch-Indië*, Albrecht: Martinus Nijhoff, 1920, pp. 25-31, 小野邦彦・中川武「ジャワ島のシヴァ教系チャンディにおける非対称の伽藍構成について - インドネシアのヒンドゥー教系建築の配置計画」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1999, pp. 203-234)。
- (35) チャンディ・グラの囲繞壁の正面の壁に設けられた開口部は、中央の副祠堂と南側の副祠堂の間のスペースの延長上にあったことが報告されている (前掲書注 (29) p. 13)。一方、チャンディ・サンビサリは、囲繞壁の四方の壁の中央部に開口部が設けられているように見えるが、北側のものは壁がはめこまれた盲門になっている。また同遺構の発掘報告書によれば、東・南側の開口部も、当初は盲門であった可能性が高いという (Depdikbud (Departemen

Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan), *Dua puluh tahun pemugaran Candi Sambisari*, Yogyakarta: Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Daerah Istimewa Yogyakarta, 1988, p. 17)。しかしながら，正面（西）の開口部と，東・南・北の盲門と見られる箇所が，いずれも壁の中心には位置しておらず，反時計回り（左回り）にずらされている点は注目に値する。